
ストライクウィッチーズ&ウィザード～閃光の飛将～

キリエ・スバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ&ウィザード〜閃光の飛将〜

【Nコード】

N5189V

【作者名】

キリエ・スバル

【あらすじ】

「閃光の飛将」これが、彼の通り名である。

「501統合戦闘航空団」と「閃光の飛将」この二つが交わるひとつの闘いの物語……。

作者は初心者ですので、あまりきついことは言わないでください。

プロローグ（前書き）

初めまして^^キリエ・スバルです^^

ストパンの小説、拙いかもしれませんががんばって書きたいと思います^^

ウィッチに不可能はない！

プロローグ

それは、懐かしい記憶……。といっても、少し前なんだけど、

「いつか絶対……」

白い髪の子が僕に向けていう。

「ああ、いつか、お前と一緒に空を飛ばう」

僕は、園子に精一杯な笑顔を向けていう。

「うん！」

そして、握手して……

「夢か……。」

僕、永倉健一は扶桑海軍少尉、夢に出てきた場面の時は、まだ准尉だっけな

現在は、各国がネウロイ相手にてこずっているときだ。

そこで、各国が、国と国の壁を越えた、第501統合戦闘航空団通称JFWストライクウィッチーズをはじめ、第502統合戦闘航空団、ブレイブウィッチーズ、第503……と次々、連合軍を作り始めた。

僕は、第501に補充隊員という形で転属が下った。どこからって？それは、扶桑海軍のお偉いさんからだ。

「はあ、第501か、これで僕もはれてエースの仲間入りか、よし、がんばるぞ！」

扶桑刀と弓、そして、ストライカーを輸送船に乗せ、

「出発！」

港に敬礼をした。

プロローグ（後書き）

というわけで、プロローグ編終了です。

これから、がんばりますのでよろしくです^^

次回は、早速戦闘かな？

第501統合戦闘航空団（前書き）

一話目いきます^^

第501統合戦闘航空団

「うええ」

僕はそこまでよい安い体質ではないけれど……。船だけは、別なのだ。

「大丈夫ですか？」

船のクルーが心配そうに話しかてくる

「ああ、大丈夫ですよ、それで、後どのくらいでブリタニアにつきそうですか？」

「うーん、あと一週間ぐらいじゃないでしょうか？」

え？一週間、一週間もこの船の上……。

「うげえ」

顔面蒼白になっていると

「大将、空じゃ強いが、船に弱いか、かっかっか、やっぱり人の子だな」

船長さんが豪快に笑っていた。

いや、そりゃ人の子だけど、この船は勘弁……。

「うっ、はあ、早く逢えないかな、エイラ」

甲板上で酔いに耐えながら、遠くを見つめた

――――

船酔い地獄もようやく終わりそうである、そう、あれからもつすでに一週間たったのだ。

それはもう、苦難の連続だった……。船酔いとか船酔いとか船酔いとか？

「もう、これで、地獄とおさらばだー」

歓喜のあまり大声で叫ぶと

「俺の船がそんなに地獄だったか？」

後ろに、この世のものとは思えない姿をした船長さんがいらっしやる……。。

「い、いやその、アナタ様の船はとても心地よいのですが、いかにせん私風情がこの船のゆれに耐えられるわけは……」「はっはっは、そんなに怒つたらんよ、大将が船ぎらいなのは有名ですから」勘弁してくださいよ……。」

その後も、船員から、からかわれながら、目的地、ブリタニアにも
うすぐ到着というとき

ウウウウ!!!!!!

「警報！」

まさか、ネウロイか！そんな、こんなところまでくるとは

「船長！」

「ああ、大将！」

「やり過ぎるか？」

ダメもとで試してみた

「船では振りきれないでしょう」

「やっぱりか・・・」

下唇をかみ締める

「整備班！、閃電の用意！」

仕方がない、ここは僕が行くしか・・・！

「了解！」

僕の掛け声で、整備班が閃電の準備に取り掛かる、僕は荷物から一本の扶桑刀を取り出した。

「飛翔、行くぞ！」

「閃電用意できました！」

僕はその声を聞き、閃電に向けて走り、軽くジャンプしてソレをはく

「永倉健一、出る！」

その声と共に一気に目標に向け飛翔した

「了解」

「大丈夫かしら」

私は心配になりながら信頼の置ける右腕に声をかける

「なあに、大丈夫さ、なぜなら」

彼女が自信たつぷりにいう

「なぜなら？」

疑問に思い問う

「あの船には、優秀なやるがいるからさ」

――――

「はぁあああ！――！」

ネウロイとのドッグファイトを演じ、船から少しずつはしていく

「さすがにこのサイズは一人ではきついな」

そのとき、敵側面に弾丸が命中した

「誰だ！」

そちらのほうへ向くと

「こちらシャーロット・イエーガー、これより援護する」

「助かります」

その後も、二人で、戦うが一向に、向こうが倒れてくれない

「このままじゃ、」

イエーガーさんが顔をしかめる

そのとき、対装甲用ライフルが着弾した

「リーネ」

「シャーリーさん、遅れて申し訳ありません」

「いや、いいんだ、こっちは、って話は後だ」

イエーガーさんは、僕の照会をする前にネウロイへ向かっていった

「リーネ、シャーリーだいじょうぶか」

この気の抜けるような声は

そうか、彼女たちは、501のメンバーか、

三人の攻撃でコアが出た

「まかせろ！」

あまたのビームをかくぐり

「あ、あの構えハ！」

エイラが気づいた

目の前で構えた僕をネウロイが焼き尽くそうとビームを放つ

「あ、危ない！」

リーネさんが叫ぶ

「いくぞ！必殺！龍飛剣！」

ビームを刃で逸らしながらコアごと敵を切り落とした

――――

いろんなことはあったが無事ブリタニアに着いた

「今日はまず、補充隊員を紹介します」

中佐に呼ばれみんなの前に出る

「初めまして、ウィザードの永倉健一です。階級は少尉です。よろしくお願いします」

第501統合戦闘航空団（後書き）

みんなと合流してまずは終了です。

下手に伸ばすとまとまりが悪くなりそうだったのでここできりました。

主人公設定（前書き）

主人公設定です^^どうぞ！

主人公設定

名前、永倉健一

世にも珍しい、ウィザードの一人で、新撰組の永倉新八の末裔、彼の秘儀「龍飛剣」（下段の構えから上へ敵の剣を下へ擦り上げながら下へ斬りおとす技）を扱える。文武に秀でており、指揮官としても有望視されている。以前、スオムスでの任務経験があり、そのときに、エイラとは知り合いになっている。

使い魔、鳶とんび

固有魔法、「念力」、周りの人、物を自由に動かせる力、しかし、使用中は高い集中力を必要とするため動けなくなる、そのため、使いどころが難しい。

ストライカーユニット、「閃電」（こちらは、昼間専用）「閃光」（こちらは、夜間、暗いところでの戦闘で使用する、もっぱらこちらを使うことが多い）

武器、扶桑刀「飛翔」（どこまでも飛べるようにという意味を込め自分で打った）

弓「宵闇」（闇にまぎれて敵を射るスタイルに合わせ）

通称、「閃光の飛将」（使用ユニット&武器と、瞬く間に、敵を切り伏せるスタイルをかけて付けられた通称、ちなみに、将は男をあらわす）

再会

「初めまして、ウィザードの永倉健一です。階級は少尉です。よろしく願います」

中佐に言われ一応自己紹介をした。

「・・・・・・・・」

あれ、皆さん反応がない？

「ええええええええええ」

うわッびっくりした。

「エイラさんどうしたの？」

中佐がびっくりして尋ねた

「あ、あわわ、なんで、健一がここにいるんだ！」

しどろもどろになりながらエイラが言う

「どうしてって、だから、補充隊員で、ってさっき一緒に戦ってたよね」

「でもでも」

二人の間で勝手に会話が進み周りが置いてきぼり状態……。

パンパン、中佐が手を打って

「はい、二人ともその辺にして、話が進まないわ」

「はい」

「はい」

そういわれ二人はおとなしく従った

「さて、それでは続きをしましょう、もう知っているかもしれないが、私は、ミーナ・ヴィルゲ、階級は中佐よ」

「私は……ってお前は知っているよな」

坂本さんに問われ

「はい、お久しぶりですね、またお願いします」

「はっはっは、任せておけ」

「あ、あの、私はリネット・ビショップです。先ほどはありがとうございます」

さっきの戦闘のことが

「いや、別にいいよ、それよりもこれからよろしくね」

「はい！」

緊張してみたいけど、少しはとけてくれたかな？

「ワタクシはペリーヌ・クロステルマンですわ」

「うん、よろしく」

「私は、ゲルトルト・バルクホルンだ、お前は規則を守っていそうで安心だ」

「私は、エーリカ・ハルトマン、これからよろしく」

「はい、よろしくお願いします」

「私は、シャーリーだ、よろしくな」

「私はルツキーニだよ」

「二人ともよろしくです」

「.....」

「.....」

エイラと僕は無言で見詰め合って

「はあ、まあ、名乗らなくても分かるよナ」

気恥ずかしそうに顔をそらす

「あ、ああ」

その反応にこっちまで少し照れる

「・・・えっと、私は、サーニャ・V・リトヴァクです。昼間はあまり起きてないけど、夜間哨戒の機会があったら、そのときはよろしく」

「はい、僕も専門はどちらかというと、夜間なので、よろしく願います」

サーニャさんは顔を綻ばせ

「うん、よろしくね」

笑顔でそういつてくれた

「ムー――」

エイラが一人でうなっていたが、その場は一応終了ということなり、僕は、中佐から跡で部屋までくるように言われた。

――――

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

言われたとおり中佐室に来てみると、そこには、坂本さんと中佐とバルクホルンさんがいた

「早速だけど、貴方の専門は何？」

専門？せんもん・・・

「刀を使った接近戦と、弓を使った中距離からの射撃です。昼間夜間共にいけますが、やかんのほうが得意ですね」

「そう、美緒のいったとおりね」

美緒というのは坂本さんの名前である

「だろ、アイツは、そういうやつだ、万能型で使い勝手もいいだろ。」

「ミーナ、永倉には一応、昼間の任務に着かせ、状況をみて夜間哨戒に出すか決めればどうだ？」

バルクホルンさんが提案すると

「それが最善ね、聞いたとおりだけど何か質問はある？」

「いえ、ありません」

一礼してから中佐室から出ようとする

「ちょっと、最後にいいかしら」

「はい」

「エイラさんとはどんな関係」

どんな関係、恋人ではない、友達というほど他人でもない

「友達以上、恋人未満ではないでしょうか、とにかく大切な人ですよ」

失礼しました、そういつて、部屋でた

そう、このとき実は、部屋の外で、ルッキーにとハルトマンが盗み聞きをしていた

このあと、ちょっとした騒動になるのだが、これは、まだちょっと先のお話

再会（後書き）

セリフばかりで描写がたりないかも・・・。

すいません、モットがんばります

日常、そして、初任務

あれから一騒動あった。

ハルトマンさんとルツキー二さんに、エイラのことを言いふらされて、しかも、エイラと僕は付き合っているという嘘を含み、噂を流したのだ。二人で誤解を解くのに奔走した。しかし、二人で行ったことが余計にこの噂に拍車をかけたようで、しばらくの間基地内では、この噂で持ちきりになった。

おかげで、僕は、整備班の男性連中に、嫉妬や殺意を込めた視線を送られることになってしまった。

「はあ、どうしてこうなったんだ」

ハンガーで、一人、頭を抱えながら考える

エイラのことは嫌いじゃない、いや、むしろ二人のいうような関係になりたいと思っているのかもしれない。だが、当のエイラは、サーニヤさん一筋のようだし、どうしたもんか……ってあれ？これじゃ、この噂を嫌がっていないことになって、二人の思う壺なわけで……

と思考が時空の彼方へ飛んでいきそうになった。

「おい、健一！」

「うわあ」

エイラがいきなり声をかけてきたので、びっくりして、後ろにひっくり返ってしまった。

「どうしたんだ？いきなりすっ転んで」

「いえない、いえるわけがない、エイラのことを考えていてタイミングよく本人がきたからとは、口が裂けてもいえない。」

「いや、別に、急に声がしたからびっくりして」

適当にごまかした

「なあ、こんな風に二人で話すのは、何年ぶりかな」

いきなり隣に座るとそんなことを言い始めた

「わかんない、だけど、久しぶりなのは確かかな」

こんな感じで話すのは懐かしいな

昔二人でスオムスを飛んだときを思い出す

「あの頃はいろいろとあったな」

「ソウダナ」

それから二人で夕食の時間まで話した。

久しぶりなので話が弾みとても楽しい時間だった。

だが、その一部始終が、例の二人に目撃され、次の日、なぜか、掲示板にネタとしてさらされていた。

これで、さらに誤解は深まるのであった……。

とまあ、そんな騒動も落ち着き始めた頃、ネウロイが現れた。

僕が補充隊員として、赴任してきたからの初任務だ。

「今日は、宵闇にしよう」

一人で呟くと、閃電と一緒に、弓を持って、ハンガーを出る

「永倉健一、出る！」

勢いよく僕は発進した。

「敵ネウロイのコアを確認、敵の中央内部にある」

坂本少佐が魔眼で、コアを確認してくれた

ちなみに今日の任務のメンバーは、リーネさん、宮藤さん、少佐、そして、僕だ

「リーネは私と、宮藤は永倉と一緒に行動しろ」

少佐に指示で、僕たちは、それぞれネウロイに向かっていく

「宮藤さん、少しの間、シールドで僕を守ってもらえますか？」

「はい、わかりました」

すんなりときいてくれて助かった。

「じゃ、行きますよ！」

僕は意識を集中して、魔法で矢を出す。それも、一本二本ではなく、大量に。

「はああああ！！！！」

魔法で出した矢をひとつに集めて大きな一本の矢にする

「・・・・くうう」

その矢を一気に引き絞り

「・・・・ハ！」

放つ

そして、意識を集中して、その矢を寸分たがわず、敵のコアにぶち当てなければならぬ

「・・・うう」

もうすこしだ、もうすこしで敵のコアにぶち当たる直線コースに入る

「ううううあああ」

意識を手放した瞬間、その矢は、寸分たがわず、直撃コースの通りに正面から一気に貫通した

「す、すごい」

宮藤さんが驚いていた

「はあはあ、疲れた」

それから僕たちは無事に基地に帰還した

日常、そして、初任務（後書き）

久しぶりです^^

遅くなって申し訳ありません。

そろそろ、受験シーズン、早く決まればもっと更新スピード上げられるかも^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5189v/>

ストライクウィッチーズ&ウィザード～閃光の飛将～

2011年10月7日14時30分発行